

留学先決定に至るまでの経緯

楊 悠琦

はじめに

2020年1月から Boston University に学部生として留学することになりました楊 悠琦と申します。教育格差というテーマに興味を持っており、解決策を考える中で Neuroscience や Public Policy を中心として専攻したいと考えております。本報告書では、留学を志してから留学先大学の決定に至るまでの経緯についてご報告致します。

出願の経緯

両親は中国出身ですが、わたし自身は日本で生まれ、小学校から高校までは日本の公立校に通っていました。留学したいという思いはもともと抱いていたのですが、高校二年生のときにスタンフォード大学のサマープログラムに参加して、日本の大学との違いをまざまざと感じたのをきっかけに留学ではなく進学することに興味を抱き始めました。その後、アメリカの大学システムを調べていく中でリベラルアーツ教育の概念にふれ、自身が思い描いていた理系と文系にとらわれない枠組みの学びができるアメリカの大学を本格的に志すようになりました。両親に自身の意向を伝えたくて相談した結果、これまでの学業の集大成として日本の大学も受験したうえで、アメリカの大学を受験することに決めました。

出願の経過

一出願書類

アメリカの大学は生徒の学業成績から賞歴、推薦書など多様な観点から審査します。それぞれについて、自身の経験を交えながら説明いたします。

- ・過去4年間の GPA と学年順位

これらは高校でどれだけ優れた成績を残したのか、すなわちどれだけ努力してきたのかを見るためのものです。そのため、最初の成績が悪かったとしても、次の3年間で改善の傾向が見られたら大きな問題にはなりません。ただ、逆に右肩下がりだと悪い印象を与えてしまうこととなります。

課外活動やテストの受験などでとても忙しい中で、かつ競争が激しい校内で、トップスクールに必要な3.75/4.0以上の成績、学年上位10%の成績を維持するのはとても大変でした。海外大学進学のための準備と両立するために、できるだけ学校で授業内容を理解するよう努めました。最終的にGPAは3.8/4.0をとり、学年順位は高校三年生の一学期で160人中4位、二学期はテストの受験に追われてしまい少し落ちてしまいましたが何とか11位をとり上位10%を維持できました。

これらの成績の提出はCommon Application(共通出願システム)上で行います。自分のApplicationでGPAと学年順位を記入するだけでなく、高校の先生(School Counselor)も先生用のApplicationで入力してもらう必要があります。また、中学3年生から高校3年生までの英文成績書も先生用のApplicationからアップロードしてもらうこととなります。

・課外活動

学業だけでは自身の心が何に向いているか、そしてそれは確かな興味かどうかを見極めるのは困難なため、授業外のさまざまな活動に取り組み将来像を見出せるようにしました。

わたしの場合、校内でしたら部活動や委員会活動、研究活動、校外でしたらサマープログラムやWEBページの執筆、インターン、ピアノなどに取り組んでいました。Common Applicationに10個挙げる欄があるので、さまざまな興味を示すために自分が特に熱心に取り組んだものを選び、記入しました。

・賞歴

賞歴はSchool(学校), Regional(地域), National(国内), International(国際)の4つに分けられますが、上位校ですと全国大会または国際大会での受賞歴があると望ましいです。また、受賞歴にはコンテストだけでなく、奨学金も含まれます。

Common Application には5つまで書き込みので、わたしは英語ディベート全国大会の受賞と、エッセイコンテストの受賞2つ、そして貴財団の奨学金も含めて2つの奨学金を記入しました。

・ SAT

College Board 社による生徒の読解力・文法知識・数学を測る試験です。ほとんどの大学で出願時に必須のものとなります。日本でいうセンター試験のようなもので、GPA だけですと在籍校のレベルが判断しにくいいため SAT の結果も重視されています。

はっきりとした基準があるわけではないのですが、トップスクールを出願する際には SAT が 1500/1600 以上あった方がいいとよく言われています。また、日本のセンター試験と異なり、何回も受験ができるのですが、受験しすぎると逆に評価が下がるので目安として3回程度が好ましいと耳にしたことがあります。わたしの場合は、高校2年次に課外活動で首が回らなかつたので、高校2年の最後に1回、その後高校3年生の間に3回受験して目標点にこそは届かなかつたものの1470点を取りました。

SAT と同じ役割を果たす試験として ACT が挙げられます。理科や数学の点数配分が大きいため、理系科目が得意な生徒にはおすすめです。わたしも1回受験してみましたが、パソコンベースの形式に慣れずにリーディングであまりいい成績を出せなかつたので、最終的に SAT に集中することにしました。

・ TOEFL/IELTS

海外からアメリカの大学に出願する際、ほとんどの場合 TOEFL iBT のスコア提出が必須です。100/120 以上がトップスクールのボーダーラインと言われているので、自身もそれを目指しました。初めて受験したときは 89/120 でしたが、その後なかなかスコアが伸びず5回受けて、ようやく 108/120 を取得しました。SAT と違い、TOEFL は何回受験しても大学には一番良かつた1回分のみ提出すればいいので、強いプレッシャーはあまり感じませんでした。

また、TOEFL は IELTS で代用可能なのですが、受け付けていない学校もあるので志望校の出願要件をしっかりと確認する必要があります。わたしの場合は高校1年生の時、試しに IELTS を受験して 6.5/9.0 を取得したのですが、当時の志望校が IELTS の結果を認めていないと知ってから、TOEFL に切り替えました。

一出願スケジュール

自分は受験を決めたのはかなり早かったものの、課外活動に集中しすぎてしまったため受験の準備を本格的に始めたのは最後の一年でした。簡単にですが、以下に高校3年次のスケジュールを記載いたします。

5月 SAT 受験

7月 TOEFL 受験

課外活動で香港へ

8月 SAT 受験

9月 TOEFL 受験

船井情報科学振興財団 応募

エッセイコンテスト応募

10月 SAT 受験

11月 SAT Subject Test 受験

TOEFL 受験

12月 高校の期末試験

エッセイ

SAT 受験

1月 Regular Decision でボストン大学をはじめ複数校に出願

面接

2月 面接

国内大学受験

3月 結果通知

最後に

この度、船井情報科学振興財団に採択していただいたおかげで、大学出願の選択の幅が増え、さらに将来の展望も見えるようになったと考えています。アメリカの大学を受験する際、国籍が大きな壁となってわたしの前に立ちはだかりました。友人と同様に日本の財団に応募しようとしたものの、国籍要件に当てはまらないがゆえに応募する機会がとても少なかったうえ、大学の Financial Aid に応募するだけで合格率がほぼ無きに等しくなってしまうため、それもなかなかあてにすることもできない状況でした。そのため、貴財団の採択がなければ、アメリカの大学に進学することはできなかったと思います。また、採択後に財団の方から先輩を紹介していただいたことも大きな励みとなりました。受験時に多くの貴重なアドバイスいただいたり、財団が企画してくださった会で優秀な大学院の方とお会いする機会もいただけたため、大学卒業後の将来像についても深く考えることができるようになりました。今後の大学生活でも初心を強く持ち、積極的に多くの挑戦をしていきたいと考えておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。